



Connecting Cultures:
From Shakespeare
to Contemporary Asian Theatre

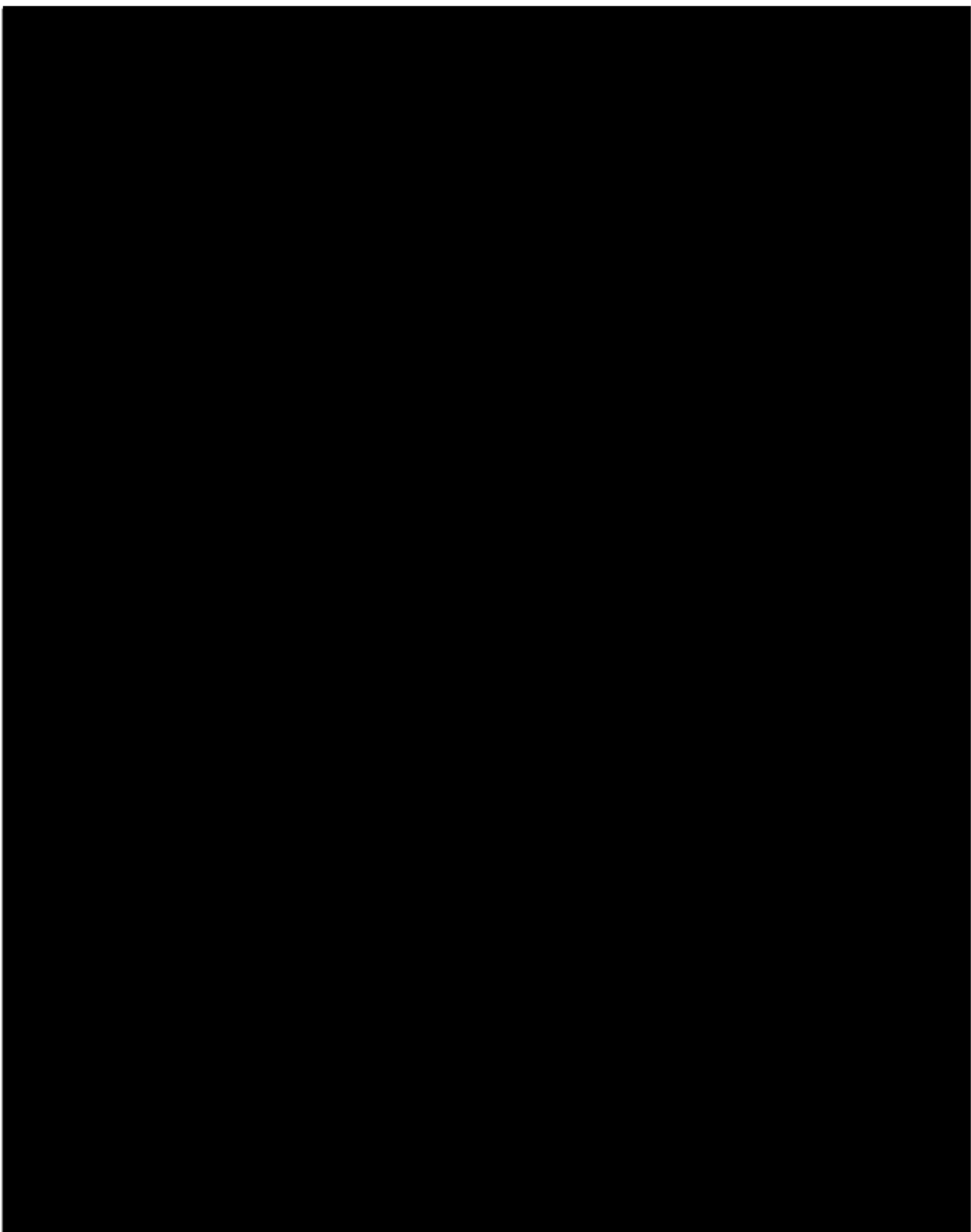
文化と文化をつなぐ

シェイクスピアから現代アジア演劇まで

浜名恵美 著
by EMI HAMANA

Connecting Cultures:
From Shakespeare to Contemporary Asian Theatre
by Emi HAMANA

University of Tsukuba Press, Tsukuba, Japan
Copyright © 2012 by Emi HAMANA



野村萬斎『まちがいの狂言』2005年 世田谷パブリックシアター (撮影:久家靖秀 写真提供:万作の会)

『THE BEE』English Version ワールドツアー 2012年2月 水天宮ピット(東京) 左：野田秀麟 右：キャサリン・ハンター
(撮影：谷古宇直彦 写真提供：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団))

本書は、演劇やパフォーマンスに多少関心はあるけれども、劇場や公演に行きそびれているとくに若い人々の背中をポンと押したいと思って書いた。そのために、文献目録に関しては妥協することはしなかったが、データベースから何百もの作品の情報をとりこむことはやめた。専門家や研究者には興味深いものでも、留学生を含む多くの学生、それもとくに都市部ではなく地方や郊外に住んでいる人々には、一本の芝居を見にいくだけでも大変なお金と時間がかかり、大量の情報を提供することが親切になるとは限らない。それで、「インターフェイス シェイクスピア上演のフィールドワーク」でとりあげた作品は別として、チケットが比較的廉価に入手できる上演も含めて、作品を精選して論じることにした。シェイクスピアからアジア演劇まで二〇本程度のパフォーマンスについての考察から何らかの刺激を受けて、実際に見にいったら、これにまさる喜びはない。

いまやオールド・メディアといわれてもおかしくない演劇はマイナーなジャンルであり、あまりスマートではないかもしれない。二〇一一年初頭からの北アフリカ・中東で発展した独裁政権打倒・民主化運動にソーシャル・ネットワークのフェイスブックやツイッターが威力を発揮した。フェイスブックの前に演劇は無効にみえるかもしれない。二〇一一年三月一日に発生した東北・関東大震災と福島第一原子力発電所事故に関しても、演劇は無効にみえるかもしれない。

だが、本当にそうだろうか。本論で明らかにしていくつもりだが、演劇パフォーマンスは独自の存在理由と魅力をもっている。

とくにインターカルチュラル・パフォーマンスは、異文化理解の点からもっと期待されてよい。



周知のように、国際親善は易く、理解は難し。異文化理解、共生や共創の理論と実践は、今後の世界にとってますます重要になる。むしろ、より深刻な問題は、国際的チームを組んでも、ソーシャル・ネットワークを駆使しても、世界に存在する何千もの言語も文化も理解できるはずがないし、まして理解や研究を十分深めることもできないという現実である。これは、たしかに、不可能性への挑戦である。しかし、本書でせめてその片鱗だけでも示すつもりだが、この挑戦はおこなうに値する。

三・二一大震災後、多数の劇団が休演し、また多数の海外の劇団の公演が中止された。私自身は、三月に韓国の留学生と一緒に『焼肉ドラゴン』のソウル再演を見に行く予定であったのだが、未曾有の大災害の影響で、訪韓をキャンセルするほかなかった。やがて、何人もの日本の演劇人が演劇の上演や再開に向けて、新聞やインターネットで、苦悩と覚悟を述べはじめた。その中から一つだけ引用しておこう。

演劇は、けっしてすべての人にとって必要なものではありません。ただ、演劇は、たしかに不要不急のものに見えますが、ある観客の、ある瞬間にとっては、人生を変えるほどの出会いになる場合があります。できるだけ、その機会を失いたくないと、私たちは考えます。(二〇一一年三月五日、青年団代表・こまばアゴラ劇場芸術監督 平田オリザ、青年団メール・マガジン、一五八号、二〇一一年三月一八日。)

——そうだが、やっぱり芝居を見にいこう。

凡例

- 一 各章に数点の写真を掲げ、本文の理解を助けるように配慮した。
- 二 シェイクスピアの英語テキストは、Richard Proudfoot, Ann Thompson and David Scott Kastan, eds., *The Arden Shakespeare Complete Works* (Surrey: Thomas Nelson and Sons Ltd., 1998) から引用した。芝居の邦題は、『ハムレット』『冬物語』『テンペスト』など、最も定着していると思われるものを用いた。テキストの引用は、幕、場面、行を、たとえば一・一・一一（第一幕第一场第一行）のように表記した。邦訳は、既存の翻訳を参考にしながら、自分の訳を用いた。
- 三 作品名（芝居、書籍ほか）については、「」でくくり、初出時に原則として原綴と、芝居の場合は必要に応じて初演年を（）内に表示した。
- 四 年号は、原則として、引用文を含めて、西暦で統一した。
- 五 本文中の引用文や重要概念は「」でくくった。
- 六 必要に応じて、人名、固有名詞、重要概念などの原語を（）内に記した。
- 七 本書のキーワードの一つは、パフォーマンスである（プロローグ、2(5)参照）。この語は、文脈に応じて、上演、実演、実践などと記すこともある。
- 八 引用・参照文献については、詳細を巻末の文献目録に掲載し、各章の註には、著者の姓と引用または参照した頁番号のみを記した。同一著者が複数の文献を執筆している場合は、著者の姓と文献のタイトル（の一部）を記した。英語の紙媒体と電子媒体の文献表記は、MLA (Modern Language Association) の方式に準じた。外国語文献はアルファベット順に、日本語文献は五十音順に並べた。
- 九 韓国人、朝鮮人、在日コリアンの氏名については、それぞれ日本でよく使われている表記に従い、漢字（カタカナ）またはカタカナ（漢字）で記した。

